

乳がんに対する看護大学生の知識と自己検診行動の実態

坂本弘子 市川裕美子 堺香奈子 小出るみ子 佐々木範子

要旨

本学学生に対し、乳がんの健康教育を考える基礎資料とすることを目的に、身近に乳がん経験者がいる群と、身近に乳がん経験者がいない群で、乳がんに対する知識や乳がん自己検診法、乳がんに対する関心と意識行動に違いがあるのかを検討した。患者が増えていること、病期分類、治療方法、術後薬物療法、10年間の経過観察についての知識に関連がみられた。乳がんのサブタイプ、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群、男性乳がん、遺伝子検査、予防的切除が保険適応になったことの知識は、少なかった。乳がん自己検診法については、知っているが8割であったが、時々でも実施しているが1割と少なく、心配していない、やり方がわからない、あまり興味がない、面倒だからという理由が多かった。乳がんの啓発教育については、受けたいと答えたのは5割を超えていた。

キーワード：乳がん 大学生 遺伝子検査 自己検診法 啓発教育

I. はじめに

がんは、1981年より日本人の死因の第1位であり、2019年にがんで死亡した人は、37万人を超えている¹⁾。2017年に新たに診断されたがん（全国がん登録）は97万人を超え、生涯でがんに罹患する確率は、男性65.5%、女性50.2%（2人に1人）であると推測されている¹⁾。特に、20歳以上のがんは女性に多く、20歳から39歳のがんでは約80%を女性が占めている¹⁾。厚生労働省は、「がん患者を含めた国民が、がんを知り、がん向き合い、がんを負けることのない社会」の実現を目指すことを最大の目標として、様々ながん対策を講じている。

15歳から39歳の思春期・若年成人を意味するAYA (Adolescent and Young Adult) 世代のがんは、子宮頸部上皮内癌が最多で、次に乳房上皮内癌の順であった¹⁾。つまり、25歳以降のがんの急激な増加は、女性における子宮頸癌と乳癌の増加によるものである。国立がん研究センター2017年罹患情報「最新がん統計」によると、日本人女性が生涯で乳がん

に罹患する確率は、10.6%（9人に1人）で、年齢階級別にみると20歳を過ぎたころから認められ、30歳半ばから増加し、40歳～50歳代でピークを迎え、死亡率は年々上昇している。がん罹患数予測（2020年）では、乳がんの罹患数は92,300人、子宮がんは28,200人と予測されている²⁾。

2000年にPerouらが、乳がんの遺伝子発現プロファイリング（GEP）を行って以来、サブタイプ分類が注目され、それによって予後や薬物感受性が異なり、治療や予後が大きく変化した。さらに、米国の女性俳優が遺伝性乳がん・卵巣がん症候群（HBOC）のBRCA1遺伝子変異を有しており、2013年にリスク低減両側乳房切除術を、2015年にリスク低減両側卵巣卵管摘出術を施行したことが日本のメディアでも報道された。これまで日本の保険診療において「傷病に対する治療」が対象であったが、2020年度の公的医療保険の改定により、一定の条件を満たす場合に「傷病になる前の治療」を保険診療の対象とし、予防切除が可能になった。このように乳がんに対する検査や治療

が変化していく中で、早期発見をすれば予後は良く、治療の選択肢も豊富であるため、生存率もあらゆるがんの中でもトップクラスであるが、若年性乳がんは進行度が高くなるにつれて予後が悪く、一次予防が難しい疾患であるため、早期発見・早期治療が重要であることに変わりはない。乳がん検診に関し、AYA 世代は任意型検診であり、対策型乳がん検診として 40 歳以上を対象に 2 年に 1 度とする検診ではない。乳がんの初発症状として本人によるしこりの触知が 8 割以上を占め、若い世代から健康管理の一環として自分の乳房に関心をもち自己検診を推奨することが必要であると考え。そこで本研究では、AYA 世代である本学学生に対し、乳がんの知識レベルと関心や意識行動の実態を明らかにし、健康教育を考える基礎資料とすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査期間

令和 3 年 7 月～8 月に実施した。

2. 調査対象

本学看護学科 1 年生から 4 年生 250 名に対して、質問紙を配布し、238 名の回答を得た。無記名自記式質問紙調査とし、回収率は 95.2% であった。

3. 調査内容 (資料)

基礎調査として、学年、性別、年齢、身近に乳がん経験者の有無、いる場合にはだれかと求めた。

乳がんに対する知識では 15 項目を設定し、乳がん自己検診法については 5 項目とその内容とし、乳がんに関する関心と意識行動については 5 項目の設問を設定し回答を求めた。

4. 分析方法

データ分析方法は、株式会社エスミの Excel 太閤を使用し、有意水準を 5% として検定した。基礎的集計、クロス集計、独立性の検定を行い検討した。

5. 倫理的配慮

対象者に対しては、調査票の表紙に、研究の動機、目的、方法、匿名性の厳守に関する配慮点を述べ、研究参加は自由意思であり、回答内容は全て統計的に処理し、研究目的以外には使用しないことを明記した。

調査票の配布は、講義終了後に行い、回収方法は回収箱を設置し、留め置き法とした。また、研究同意については、調査票の回答をもって同意とみなすことを説明した。

データは無記名で、ナンバリングを行い集計することで、学生個人が特定されることは無い。さらに、データ処理はインターネットに接続されていないパソコンで実施し、入力されたデータはパソコン本体ではなく外づけのメモリ媒体で管理した。媒体そのものは鍵のかかった引き出しに保管し、研究終了後はデータを速やかに破棄することとした。本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した【21-05】。

III. 結果

1. 対象者の特徴

1 年生 60 名、2 年生 64 名、3 年生 55 名、4 年生 59 名の計 238 名の回答を得た。性別では、男子学生 34 名、女子学生 203 名、無回答 1 名であり、年齢構成は、18 歳から 33 歳であった。身近に乳がん経験者がいると答えたのは 1 年生 10 名、2 年生 10 名、3 年生 12 名、4 年生 9 名の計 41 名 (以下 A 群)、いないと答えたのは 197 名 (以下 B 群) であった (表 1)。また、その内訳は、親戚が 16 名、祖母が 15 名、親が 8 名、知人・友人が 4 名で姉妹はいなかった。

2. 乳がんに対する知識

乳がんに対する知識について、身近に乳がん経験者がいる A 群と身近に乳がん経験者がいない B 群で比較した (表 2)。

乳がんの患者が増えていることを知っているでは、良く知っているとしたのは A 群 41.5%、B 群 18.3% であった。少し知っている

表1 対象者の特徴

		全体 n=238		身近に乳がん経験者がいるA群 n=41		身近に乳がん経験者がいないB群 n=197		p値
		n	%	n	%	n	%	
学年	1年	60	25.2	10	24.4	50	25.4	0.776
	2年	64	26.9	10	24.4	54	27.4	
	3年	55	23.1	12	29.3	43	21.8	
	4年	59	24.8	9	21.9	50	25.4	
性別	男	34	14.3	4	9.8	30	15.2	0.357
	女	203	85.3	37	90.2	166	84.3	
	無回答	1	0.4	0		1	0.5	

表2 乳がんに対する知識

		A群 n=41		B群 n=197		p値
		n	%	n	%	
1.乳がんの患者が増えていることを知っている	良く知っている	17	41.5%	36	18.3%	0.005
	少し知っている	14	34.1%	87	44.2%	
	全く知らない	10	24.4%	73	37.1%	
	無回答			1	0.5%	
2.乳がん罹患のピーク年齢を知っている	良く知っている	11	26.8%	32	16.2%	0.142
	少し知っている	14	34.1%	62	31.5%	
	全く知らない	15	36.6%	103	52.3%	
	無回答	1	2.4%			
3.乳がんの好発部位を知っている	良く知っている	20	48.8%	83	42.1%	0.519
	少し知っている	11	26.8%	48	24.4%	
	全く知らない	10	24.4%	66	33.5%	
	無回答					
4.乳がんの病期分類を知っている(0期~Ⅳ期)	良く知っている	10	24.4%	30	15.2%	0.005
	少し知っている	24	58.5%	80	40.6%	
	全く知らない	7	17.1%	87	44.2%	
	無回答					
5.乳がんのサブタイプ・病理型を知っている	良く知っている	1	2.4%	6	3.0%	0.287
	少し知っている	13	31.7%	40	20.3%	
	全く知らない	27	65.9%	150	76.1%	
	無回答			1	0.5%	
6.遺伝性乳がん・卵巣がん症候群を知っている	良く知っている	4	9.8%	11	5.6%	0.302
	少し知っている	9	22.0%	30	15.2%	
	全く知らない	28	68.3%	156	79.2%	
	無回答					
7.男性乳がんを知っている	良く知っている	1	2.4%	10	5.1%	0.217
	少し知っている	7	17.1%	30	15.2%	
	全く知らない	33	80.5%	157	79.7%	
	無回答					
8.男性乳がんの検査方法を知っている	良く知っている	1	2.4%	10	5.1%	0.745
	少し知っている	7	17.1%	30	15.2%	
	全く知らない	33	80.5%	157	79.7%	
	無回答					
9.遺伝子検査が保険適用になったことを知っている	良く知っている	6	14.6%	19	9.6%	0.326
	少し知っている	10	24.4%	35	17.8%	
	全く知らない	25	61.0%	143	72.6%	
	無回答					
10.予防的切除が保険適用になったことを知っている	良く知っている	7	17.1%	19	9.6%	0.283
	少し知っている	10	24.4%	41	20.8%	
	全く知らない	24	58.5%	137	69.5%	
	無回答					
11.自己検診が早期発見につながることを知っている	良く知っている	34	82.9%	143	72.6%	0.31
	少し知っている	3	7.3%	32	16.2%	
	全く知らない	4	9.8%	21	10.7%	
	無回答			1	0.5%	
12.乳がんの治療方法を知っている	良く知っている	24	58.5%	74	37.6%	0.025
	少し知っている	14	34.1%	81	41.1%	
	全く知らない	3	7.3%	41	20.8%	
	無回答			1	0.5%	
13.術後に使用する薬物療法の種類を知っている	良く知っている	11	26.8%	26	13.2%	0.027
	少し知っている	20	48.8%	86	43.7%	
	全く知らない	10	24.4%	85	43.1%	
	無回答					
14.経口避妊薬や妊娠が進行を早めることを知っている	良く知っている	10	24.4%	31	15.7%	0.202
	少し知っている	12	29.3%	46	23.4%	
	全く知らない	19	46.3%	120	60.9%	
	無回答					
15.生存率の評価は10年間であることを知っている	良く知っている	9	22.0%	22	11.2%	0.004
	少し知っている	18	43.9%	53	26.9%	
	全く知らない	14	34.1%	122	61.9%	

と答えたのはA群 34.1%、B群 44.2%であった (p値.005)。

乳がん罹患のピーク年齢を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 26.8%、B群 16.2%で、両群ともまったく知らないのと答えた割合が多かった。

乳がんの好発部位を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 48.2%、B群 42.1%で、両群とも多かった。

乳がんの病期分類を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 24.4%、B群 15.2%で、少し知っているのと答えたのはA群 58.5%で多く、B群は全く知らないのと答えたのが多く 44.2%であった (P値.005)。

乳がんのサブタイプ・病理型を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群2.4%、B群3.0%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

遺伝性乳がん・卵巣がん症候群を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 9.8%、B群 5.6%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

男性乳がんを知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 2.4%、B群 5.1%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

男性乳がんの検査方法を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 2.4%、B群 5.1%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

遺伝子検査が保険適応になったことを知っているでは、良く知っているのと答えた人はA群 14.6%、B群 9.6%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

予防的切除が保険適応になったことを知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 17.1%、B群 9.6%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

自己検診が早期発見につながることを知っているでは、良く知っているのと答えた人はA群 82.9%、B群 72.6%で、全く知らないのと答えた割合は両群とも約10%であった。

乳がんの治療法を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群58.5%、B群37.6%で、B群では少し知っているが41.1%が多かった (p値.025)。

術後に使用する薬物療法の種類を知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 26.8%、B群 13.2%で、両群とも少し知っているのと答えた割合が多かった (p値.027)

経口避妊薬や妊娠が進行を早めることを知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 24.4%、B群 15.7%で、両群とも全く知らないのと答えた割合が多かった。

生存率の評価が10年間であることを知っているでは、良く知っているのと答えたのはA群 22.0%、B群 11.2%で、A群では少し知っている43.9%で多く、B群では全く知らないが61.9%が多かった (p値.004)。

表3 乳がん自己検診法

		A群 n=41		B群 n=197		p値
■-1.自己検診方法を知っていますか	よく知っている	7	17.1%	32	16.2%	0.024
	少し知っている	28	68.3%	95	48.2%	
	全く知らない	5	12.2%	64	32.5%	
	無回答	1	2.4%	6	3.0%	
		n=35		n=127		
■-2.自己検診法を実施していますか	実施している	1	2.9%	0	0.0%	0.007
	時々実施している	7	20.0%	8	6.3%	
	実施していない	27	77.1%	117	92.1%	
	無回答			2	1.6%	

3. 乳がん自己検診法について

自己検診方法の知識と実施状況について身近に乳がん経験者がいる A 群と身近に乳がん経験者がいない B 群で比較した (表 3)。

自己検診方法を知っていますかでは、良く知っているとしたのは A 群 17.1%、B 群 16.2%であった。両群とも少し知っているとした人の割合が多かった (p 値. 023)。

自己検診法を実施していますかでは、実施していると答えたのが A 群 2.9%、B 群はいなかった。両群とも実施していないと答えた割合が多かった (p 値. 007)。

乳がん自己検診法を実施している、時々実施していると答えた人は両群合わせて 16 名で、その理由は、早期発見が大切だと聞いた、簡単にできる、家族や知人に乳がんの人がいるの

表4 乳がん自己検診法を行う理由(複数回答可)

内容	回答数	構成比(%)
早期発見が大切だと聞いた	14	87.50%
乳がんの検診の際に勧められた	1	6.30%
家族や友人に勧められた	1	6.30%
家族や知人に乳がんの人がいるので心配	6	37.50%
心配な症状がある	1	6.30%
簡単にできる	8	50.00%
その他	1	6.30%
計	16	100.00%

表5 乳がん自己検診法を行わない理由(複数回答可)

内容	回答数	構成比(%)
あまり興味がない	35	24.30%
心配していない	44	30.60%
自分は乳がんにはならない	4	2.80%
自分の年齢では乳がんは関係ない	13	9.00%
面倒だから	32	22.20%
時間がない	26	18.10%
家族や知人に乳がんの人がいないので心配ない	7	4.90%
やり方がわからない	37	25.70%
その他	11	7.60%
無回答	5	3.50%
計	144	100.00%

表6 自己検診法はどこで知りましたか(複数回答可)

内容	回答数	構成比(%)
乳がん検診	4	2.50%
友人・家族	33	20.40%
病院・診療所	16	9.90%
ポスター・チラシ	16	9.90%
インターネット	46	28.40%
その他	57	35.20%
無回答	13	8.00%
計	162	100.00%

で心配であった (表 4)。

乳がん自己検診法を行わない理由では、心配していない、やり方がわからない、あまり興味がない、面倒だから、時間がないであった (表 5)。

自己検診法はどこで知りましたかでは、インターネット、友人・家族であったが、その他と答えた人が多く、その内容は授業、テレビ、学校であった (表 6)

4. 乳がんに対する関心と意識行動

乳がんに対する関心と意識行動について身近に乳がん経験者がいる A 群と身近に乳がん経験者がいない B 群で比較した (表 7)。

乳がん検診を受けたことがあると答えたのは A 群 9.8%、B 群 2.0%で、両群とも無いと答えた割合が多かった (p 値. 013)。

乳がんについて友人や家族と話したことがあるでは A 群 75.6%、B 群 27.9%であった。

遺伝子検査を受けたいと思いますかでは、受けたいと答えたのは A 群 46.3%、B 群 30.5%で、両群ともわからないと答えた人の割合が多かった。

乳がんの啓発教育を受けたいと思いますかでは、受けたいと答えたのは A 群 53.7%、B 群

51.3%で、両群とも多かった。

ピンクリボン自動販売機の意味を知っているかでは、知っていると答えたのは A 群 17.1%、B 群 8.6%で、両群とも見たことがないと答えた割合が多かった。

IV. 考察

乳がんについての情報が、乳がん経験者からの体験などについて SNS (Social Networking Service) などメディアを通して目につきやすくなった。しかし、その知識が正確なのか、行動変容へとつながっているかは不明なところである。今回は、身近に乳がん経験者がいる群と、身近に乳がん経験者がいない群で、乳がんに対する知識や乳がん自己検診法、乳がんに対する関心と意識行動に違いがあるのかを検討した。

乳がんの罹患率が上昇傾向であることから身近に乳がん経験者がいることが予想されたが、238 名中 41 名 17.2%の学生であり、1 年生・2 年生がともに 24.4%、3 年生が 29.3%、4 年生が 21.9%であった。

乳がんに対する知識の項目の中で、「乳がんの患者が増えていることを知っている」「乳が

表 7 乳がんに対する関心と意識行動

		A群 n=41		B群 n=197		p値
1.乳がん検診を受けたことがありますか	ある	4	9.8%	4	2.0%	0.013
	ない	36	87.8%	187	94.9%	
	無回答	1	2.4%	6	3.0%	
2.乳がんについて友人や家族と話したことがある	ある	31	75.6%	55	27.9%	0
	ない	9	22.0%	135	68.5%	
	無回答	1	2.4%	7	3.6%	
3.遺伝子検査を受けたいと思いますか	受けたい	19	46.3%	60	30.5%	0.058
	受けたくない	3	7.3%	7	3.6%	
	わからない	18	43.9%	124	62.9%	
	無回答	1	2.4%	6	3.0%	
4.乳がんの啓発教育を受けたいと思いますか	受けたい	22	53.7%	101	51.3%	0.084
	受けたくない	5	12.2%	8	4.1%	
	わからない	13	31.7%	82	41.6%	
	無回答	1	2.4%	6	3.0%	
5.ピンクリボン自動販売機の意味を知っているか	知っている	7	17.1%	17	8.6%	0.223
	知らない	16	39.0%	74	37.6%	
	見たことがない	17	41.5%	100	50.8%	
	無回答	1	2.4%	6	3.0%	

んの病期分類を知っている」「乳がんの治療方法を知っている」「乳がんの術後に使用する薬物療法の種類を知っている」「生存率の評価は10年間であることを知っている」の5項目で有意に関連がみられた。「乳がんのサブタイプ・病理型を知っている」では、両群とも全く知らないと答えた人が多く、A群65.9%、B群76.1%で、乳がんの遺伝子発現プロファイリング(GEP)の新しい知識が不足していることがうかがえる。また、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群(HBOC)についても全く知らないと答えた割合は、A群68.3%、B群79.2%であり、遺伝性乳がんの知識が不足していた。そのため、遺伝子検査が保険適応になったこと、予防的切除が保険適応になったことについても全く知らないと答えていた人が多かった。女性ホルモンが影響する乳がんのタイプによっては、経口避妊薬や妊娠が乳がんの進行を早めることがあるが、全く知らないと答えた人が、A群46.3%、B群60.9%と多かった。経口避妊薬については、日本での使用率は欧米に比べてかなり少ないといわれている中、知識の普及につながっていないのではないかと考える。

乳がん自己検診法についての項目の中で、「自己検診方法を知っていますか」「自己検診法を実施していますか」の2項目で有意に関連がみられた。身近に乳がん経験者がいることで自分のこととしてとらえることができたためと考える。実施していると答えた人の中には身近に乳がんを経験した人がいない人もおり、早期発見が大切、簡単にできると理解しており、実施していない理由では心配していない、やり方がわからないと答えた人が多く、自己検診法の必要性和やり方を普及することで実施率はさらに上がると考える。また、乳がんについての情報は、SNS(Social Networking Service)を通じて容易に発信され入手できるようになってきたが、実際に自己検診法を、インターネットで知ったと答えた人が多く、次いでその他として授業、学校であった。

乳がんに対する関心と意識行動の項目では、「乳がん検診を受けたことがありますか」「乳がんについて友人や家族と話したことはありますか」の2項目で有意に関連がみられた。身近に乳がんで治療を受けた人がいることで、より具体的に知る機会となったと考える。また、遺伝子検査を受けたいかでは、「わからない」の回答が多く、遺伝子検査としての知識が不足なのか、遺伝子を持っていることを知りたくないという気持ちがあるのか、さらに調べる必要がある。また、乳がんの啓発教育に関しては、「受けたい」が50%以上であり、「受けたくない」では、身近に乳がん経験者がいるほうが12.2%、身近に乳がん経験者がいないほうが4.1%であった。本調査では、乳がんの啓発教育を受けたいか受けたくないかのみ問い、その理由までは見いだせていない。すでに知っていると考えているのか、身近に乳がん経験者がいることで自分も罹患するのではないかと恐れているのか、受けたくないと答えた理由を明らかにし、今後の健康教育に役立てる必要がある。また、ピンクリボン自動販売機の意味を知っている割合が身近に乳がん経験者がいる群でも17.1%とかなり少なかった。ピンクリボン活動の意図を周知するような取り組みが必要である。

女性の乳がん発症率は年々上昇しており、乳がんの危険因子といわれる飲酒、肥満、運動不足、喫煙や閉経年齢、家族歴などの関与は寄与割合1割程度との推計もあり一次予防が困難である。そのため早期発見・早期治療による二次予防が重要となる。乳がん好発年齢以前の若い世代から健康教育の一環として日頃から関心を持ち、自己検診へとつなげる方法を見出すためにも、乳がん特有の生物学的特徴についての知識や情報を理解しているのか、自己のこととして捉えられているのかを明確にすることで、今後の啓発教育の取り組み方法を検討することができる。

乳がん自己検診法は、月経が終わったあと

の4~5日が一番適している。月経不順の人や閉経の人は、毎月1日など日にちを決めて行うことが推奨されている。月経のしくみについての初経教育は、小学校4年生の教科、保健の学習に始まることから、月経開始と同時期に啓発教育を取り入れること、または、25歳から64歳までの乳がんによる死亡は第1位である現状を踏まえ、18歳成人までには乳がん自己検診の習慣化ができるような対策が必要であると考えられる。

V. 結語

- 1) 身近に乳がん経験者がいる群では、患者が増えていること、病期分類、治療方法、術後薬物療法、10年間の経過観察についての知識に有意差がみられた。
- 2) 乳がんのサブタイプ、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群、男性乳がんについての知識については、身近に乳がん経験者がいる、いないに関係なく少なかった。
- 3) 遺伝子検査、予防的切除が保険適応になったことを知っている人は少なかった。
- 4) 乳がん自己検診法については、方法を良く知っている、少し知っているが8割であったが、時々でも実施しているが1割と少なく、心配していない、やり方がわからない、あまり興味がない、面倒だからという理由が多かった。
- 5) 乳がんの啓発教育については、受けたいと答えたのは5割を超えていた。

謝辞：本研究にご協力いただきました本学看護学生の皆様に感謝いたします。なお、本研究は学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)研究等補助金(研究代表:坂本弘子)を受けて実施した。

参考文献

- 1) 平成29年全国がん登録 罹患数・率 報告 CANCER INCIDENCE OF JAPAN2017 厚生労働省

健康局がん・疾病対策課

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000624853.pdf> (2021年4月12日付).

2) 国立がん研究センター2017「最新がん統計」
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2021年4月12日付)

3) 山本美由紀：乳がんに対する大学生男女の知識と意識行動の実態調査、日本健康医学会雑誌、29(3)、343-353、2020.

4) 黒谷万美子：乳がんに対する意識と自己検診行動、愛知学泉大学・短期大学紀要、50、73-78、2015.

5) 的場久美、中西伸子：女子大学生の乳がんの早期発見行動を妨げる要因の研究、奈良県立医科大学看護学研究科紀要、13、37-47、2017.

6) 田中由舞、塚本康子、佐藤郁美、若月亜希子：女子大学生の低用量ピルに関する認識と認識に関連する要因、新潟医療福祉学会誌、19-1、84-84、2019.

7) 経口避妊薬(ピル)についての知識・意識に関する全国横断調査 木原雅子 木原正博 The Journal of AIDS Research Vol. 1 No. 1・E 2 1999 P15-21

8) 乳がんと健診 ピンクリボンフェスティバル公式サイト
<https://www.pinkribbonfestival.jp/cancer/> (2022年1月6日付)

9) 富士岡幸、綿貫恵美子、小林伸行：乳房検診受診者における乳房自己触診の意識と実態、北里看護学誌、13、1-8、2011.

10) 日下知子、渡邊有紀：青年後期女性の乳房自己触診行動を妨げる要因—看護学生を対象として—、川崎医療短期大学紀要、31、15-20、2011.

執筆者紹介 (所属)

坂本 弘子 八戸学院大学看護学科 講師
市川裕美子 八戸学院大学看護学科 准教授
堺 香奈子 八戸学院大学看護学科 助手

坂本弘子 他：乳がんに対する看護大学生の知識と自己検診行動の実態

小出るみ子 八戸学院大学看護学科 助教

佐々木範子 八戸学院大学看護学科 助手

資料

質問紙

I. あなた自身についてお聞きします。

各項目のあてはまる□に✓を、【 】には数字をご記入下さい。

1. 学年 【 】 年生
2. 性別 女性 男性
3. 年齢 【 】 歳
4. 身近に乳がん経験者はいますか。 いる いない
「いる」を選んだ方はその方はどなたですか。
親 祖母 姉妹 その他の親族 友人・知人

II. 乳がんに対する知識についてお聞きします。

各項目すべてについて、あなたが知っている程度を1（良く知っている）2（少し知っている）3（全く知らない）の3段階から一つ選んで○をつけてください。

1（良く知っている） 2（少し知っている） 3（全く知らない）

1	乳がんの患者が増えていることを知っている	1	2	3
2	乳がん罹患のピーク年齢を知っている（40～50歳前半 60歳前半）	1	2	3
3	乳がんの好発部位を知っている（外上4分円）	1	2	3
4	乳がんの病期分類を知っている（0期～Ⅳ期）	1	2	3
5	乳がんのサブタイプ・病理型を知っている	1	2	3
6	BRAC1、BRAC2 遺伝子の変異が原因となる遺伝性乳がん・卵巣がん症候群を知っている	1	2	3
7	男性乳がんを知っている	1	2	3
8	男性乳がんの検査方法を知っている	1	2	3
9	遺伝子検査が保険適用になったことを知っている	1	2	3
10	がんになる前に予防的切除が保険適応になったことを知っている	1	2	3
11	自己検診が早期発見につながることを知っている	1	2	3
12	乳がんの治療方法を知っている（手術 放射線）	1	2	3
13	乳がんの術後に使用する薬物療法の種類を知っている（ホルモン剤 分子標的薬 抗がん剤）	1	2	3
14	ホルモン性の乳がんの場合、経口避妊薬や妊娠が乳がんの進行を早めることを知っている	1	2	3
15	一般的ながんは5年生存率で評価するが、乳がんは10年間であることを知っている	1	2	3

